

## 北海道地震津波の記録

## 「悔が吐きた日」より

九死に一生をえて

宮田 故 井元初一

私の家は、昔の坊小路、今の旭町にありました。

家の裏には畑があり、その向こうに観音寺というお寺がありました（今の東部保育所のところ）。

五十年前の冬のそのころ、私は赤物縄で甘鯛を釣りに行っていました。四時過ぎだったでしょうか。大きな揺れでした。

私はひいじいさんから、昔の安政津波の話をよく聞いていました。『安政の津波で、海蔵寺へ逃げたが、荷物を取りに家へ帰った人はみんな流されて死んでしまった。大きな地震の後には、必ず津波がくるよって早よう高い所へ逃げえよ。』

南隣の今津のおばあさんも起きてきて外へ出てきました。「津波が

来るよって早よう一緒に逃げんけー」と誘いましたが、「うちは息子が病気で寝よるし、嫁も大きな腹しとるんで一緒に逃げれんのか」というて、家の中へ入りました。

それから私たち一家六人はすぐに逃げました。

私が三男（六歳）を背負い、長男（十二歳）の手を引き、妻は四男（三歳）を背負い、二男（十歳）の手を引いて、家と家との間の狭いあわえをぬけて畑の道へと出ました。妙見さんを目標に真暗な細い道をみんな走り続けました。

しかし途中、難道にあがる手前の沖吉さんの家の横まで行くと、道の下に暗渠の口があつて、はや潮がふき出してきていました。あつという間に腰までつかってしまいました。みんなが必死で流されないようにつかまっていたのですが、三男が私の背中から落ちて波にさらわれ、暗渠の中へ吸いこまれてしまいました。長男も流されて、私と一緒に泳ぎました。妻たち三人も大牟岐田の田んぼの方へと流されていきました。三男を殺してしまつたとガツカリしていた私の目の前に、次の潮で三男が暗渠の口からぱっかりと浮きあがってきました。本当に運がよかったですね。あわててつかまえて抱き上げ、長男と三人でようやく新田さんの畑へはい上がり、妙見さんへと辿り着きました。